086165-000-0

4-44

隨風集

毛利　元蕃／著

M27

DBD-0896

餘姚

明治廿七年
月一日
正二位元侯題

敘

詩歌何爲而作也。出於情之自然也。心之觸物而發者情也。蓋人之在世。不得不觸物。既觸物則不得不發之情。既發之情。則不得不發之言。既發之言。而未能盡其意。於是乎。咨嗟詠嘆而不已。咨

嗟詠嘆之餘。見之文字。是乃詩歌也。虞書所謂。詩者言志。歌者永聲。蓋謂此也。故其情純良。其詩歌亦純良。其情偏駁。其詩歌亦偏駁。則就其詩歌。視其爲人。人爲慶哉。孔子曰。父在觀其志。父沒觀其行。余讀先考詩歌。而知其仁惠惻怛之情深且厚矣。凡先考之留心民事。勸農省耕。悉見其詩歌。因刻其遺稿。以示子孫云。

明治二十七年九月

從四位勳四等子爵 毛利元功謹撰

東京帝國大學圖書館藏

隨風集

春の部

初春見鶴　とみ乃野

のはるまたあさきゆきふみて
とかにあさるたつかな

浦島

のかをみのしろも海士ならて
うらこのおみにしはたるゝかな

松間鶯

いろかへぬみとりもふかきまつかえに

千代をしめてやうくひそのなく

梅風

さそひ來るあしたのまとのうめか香は
いつくのかせのたよりあるらん

水邊柳

かはかせにいとうちなひくあをやきの
みとりのかけにふねやつなかん

夕柳

ゆふ日かけうつろふをちのやまもとに
けふるを見れはやなきなりけり

閨春月

たまくらのひとりさひしきねやの内に
おほろのつきのかけそさしける

歸雁

はなもさきそらものとけきころなれは
いそかてかへれはるのかりかね

野遊

かすみたちかせのとかなるはるのゝ
かへさわをれてすみれをそつむ

苗代

くれてゆくはるをもせきやとゝむらん
なはしろみつにはなのうかへる

春山

はる來れいかをみのころもうち着つゝ
はなによそへるかつらきのやま

彌生のつこもりまよめる

かへるはるけふをかきりとおもふにも
なこりをしきはいりあひのかね

夏の部

月前卯花

つきかけのゝこるかきねのうのはなは
おもひそいつるゆきのあけぼの

山家樣

あを葉のみしけると思ひしやまさとの
のきはゆかしくあふちはなさく

名所夏月

なまはかたつき見る夜半もみしかきに
螢火のけふりたてをもあらなん

水上螢

かせわたるいけのはちすにおくつゆの

ちるかと見しはほたるなりけり

江螢

なほも江や小ふねさしゆくあし間をも
あらそに見せてとふほたるかな

照射

はこ根やま火くしのかけによるしかを
まつ間はとなくあくる夜半かな

樹陰納涼

のぼり來ていこへはもゝしはこ根やま
てる日をさふるもきのしたみち

秋の部

海初秋

わたのはらふねこく海士のまそてほも
すゝしく見ゆるあきのむつかせ

幽栖秋來

ひとゝはぬむくらのまはを今朝見れと
つゆおきそめてあきいきまけり

水邊女郎花

たかためまあたなるいろをみつかゝみ
うつして見もるをみなへしそも

枕上蟲

ものゝ思ふとねられぬよものたまくらに
あはれをそふるむしのこゑかな

月前初雁

あきの夜のつきさやかなるおほそらに
みつよつふたつわたるかりかね

夕鹿

小はぎはらゆふきりふかくたちこめて
つまとふしかやみちまよふらむ

水邊菊

みなせかはまつはかりかもきしにさく
きくゐちとせのかけうつすなり

山居秋日

うき世をはのがれてひとりすむやまの
あきのとゐとやなるゝさをしか

つきの夜ものよりかへるをりに
千くさゝく野邊ふみわけてくれにけり
かへるさおくれあきの夜のつき

惜秋

もみち葉もみおちりもてゝこのゆふへ

くれゆくあきをなほゝとゝめん

暮秋月

もみち葉のちりしくやまにありあけの
つきをのこしてあきそくれぬる

冬の部

初冬時雨

たつたひめおりしにしきのもみち葉を
ふくれにあらふゝゆいきにけり

田家時雨

小やま田のしつらかや屋のきたまとゝ
しくれよこきるかせのさむけさ

聞落葉

あけゆかは木すゑむなしくなりぬへし
よたゝこのはをかせのさそへる

池上氷

かせふけもそよきしいけのかれあしも
とつるこほりにおとたえにけり

夜会

あかつきのかねのとさゆるふる夜をも
しらてふすまのふたにぬるかな

網代

ふきおろす比良やまかせに鴉のうみの
あしろのとこやいかにさゆらん

浦千鳥

さえわたるそまのうらわのつきかけ
いくむら千とりたちさわくらん

深夜霰

かせさえてふけゆくよ半のいたひさし
おとはけしくもふるあられかな

炭竈

ゆきつもるをしほのやまのあきかせに
けふりもさむく見ゆるをみかま

早梅

はるの色をもやく見せんと年のうちに
さきやいてけんうめのはつもな

惜歳暮

とゝまらぬはるとあきとのわかれにも
まさりてをしきとしのくれかな

戀の部

祈不逢戀

かくはかりかみにいのれといかなれゝ
こひしきひとをゆめにたに見ぬ

思戀

あさまやまみねのけふりはたえぬとも
むねのおもひのきゆるまそなき

立門戀

やまのはにつきのいるまてかとのとに
まちあかせともおとつれそなき

夏夜戀

おのひ音になきあかす身のわひしさを
ひとゝつけてよやまはとゝきす

寄山戀

こひわひてつねにこゝろをつくはやま
いつかわけ見んこのもかのもを

寄風戀

いひよらんよすかもつきてあきかせに
ひとりこゝろをくたくころかな

雜の部

薄暮松風

いりあひのかねのとひゝくゆふくれに

きくもさひしきまつかせのこゑ

夜舟にて淀川を下るをりに

くたりゆくよとのかはせのみなれさを
させはみたるゝみつの上のつき

箱根山をこゆとて

いかむかりのはりきつらんはこねやま
くもよりうへゝなりゝけるかな

隨風集終

明治二十七年十月十日印刷
同　年十月十五日發行

非賣品

著者　山口縣華族
相續人　子爵　毛利元功

山口縣郡部郡山村第一第五百五十二番屋敷

發行兼印刷者　吉川半七

東京市京橋區南傳馬町壹丁目十二番地